

支援が必要な子どもの就労支援での課題について

【三条地域若者サポートステーション（サポステ）】

地域若者サポートステーション事業は、令和3年度より登録から就職までの期限のめどが、1年から3年へ延長されました。その背景には、時間をかけて就労に結び付く人が増えたことがあげられます。その傾向として、何かしらの障がいの診断があり、高校卒業後に就職に結びつかない、就職したけれどすぐ辞めてしまったという主訴でサポステに来られる方が増えています。

毎年サポステには100名前後の登録がありますが、支援センター（ハート）と情報を共有し、支援を進める事例は増えており、毎月1～2名の案件で連絡を取り合っている状況です。事例として次の2つ紹介させていただき、連携先と情報共有が図れないかお話しいただければありがたいです。

事例①

自閉症の診断があり、はまぐみに通い、小学校は特別支援学校。クリニックに通っている。父は障害者手帳の取得をすすめるが、本人は仕事の幅が狭くなるのが嫌で一般就労を希望される。アルバイトでの失敗経験があるが、ハローワーク一般求人の応募を続けるも不調。職場体験事業でサポステ利用者に理解のある職場環境でも、人の気配が気になる等で、体験途中での辞退をした。その後障がい枠に変えて就職活動開始した。サポステでの相談回数33回、2年3か月で1年前福祉支援へ変更し、現在は就職へ向けて事業見学をしている。

事例②

特別支援高等学校卒業後に専門学校に入学する。専門学校卒業後に派遣で県外就職を行い、一人暮らしを開始したが1か月で仕事を辞め、母とサポステへ相談にきた。場面緘黙でサポステでの就労支援が厳しいと伝えるも、母と本人は自覚なく一般就労を希望する。コミュニケーションを取るための声出しや、講座参加でのゲームの交渉含めて2語文ほどの返答ができるようになるが、働く手段として障害者手帳取得を提案する。サポステでの相談回数97回、2年4か月で福祉支援での相談からA型就労した。

このような就労支援をサポステで行っている経緯があります。サポステは一般就労への就職支援をするための機関であり、福祉枠での就労と違いノウハウがあるわけではありません。中学校までは特別支援学校で、その後に普通高校に入学、または専門学校などを経由して、本人や保護者が一般就労を望むケースが多くなっています。サポステではできる範囲で支援をしますが、最終的に福祉就労へ変更するケースが多く、再スタートに時間がかかっています。主観的な体験談をもとに支援計画を策定していますが、客観的な情報の手がかりがなく、支援の進みが遅くなってしまいます。また、一般就労と福祉就労について知らない保護者が多く、子どもの困り感に気づかず、一般就労を望む親御さんも来られます。

支援の必要な子どもが失敗体験で傷ついたり、積み重ねで人間不信になっていかないうような情報共有や連携体制は組めないものか関係機関からお話を伺いたいと思います。